令和２年３月２４日

保護者の皆様　地域の皆様

仙台市立南吉成小学校
校長　　平　山　　勝

令和元年度　協働型学校評価　報告

早春の候，保護者の皆様，地域の皆様には，日頃から本校の教育活動に対して，ご理解とご協力をいただき，心から感謝申し上げます。

さて，本年度，取り組んできた「協働型学校評価」について，結果がまとまりましたので，ご報告いたします。

皆様には，取組はもちろん評価アンケートへのご協力をいただきありがとうございます。本報告に目を通していただき，現在の南吉成小学校の子供たちの姿を知っていただきますとともに，更なる子供たちの成長のためには，学校・家庭・地域が，それぞれの立場で何をしていくことが必要か一緒に考えていければと思います。「子供たちのために」これからもご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

Ⅰ　令和元年度　協働型学校評価　重点目標と取組

Ⅱ　令和元年度　学校評価アンケート結果について

1　考察　「児童の姿について」「取組について」
2　成果と課題
3　学校関係者評価委員会での意見　※課題に対する対応を考えるために

Ⅲ　結果の実際

1　令和元年度　学校評価アンケート結果（表とグラフ）
2　保護者　記述
3　地域住民　記述
4　職員　記述

Ⅱ　令和元年度　学校評価アンケート結果について

１　考察

（１）児童の姿について

【　全体について　】

「児童の姿」を対象にした 23 の質問に対する児童・保護者・地域住民・学校職員の「『とても』と『まあまあ』を合わせた肯定的な回答」を「80%を基準にした達成度」と「80%に到達しなかった質問」について集計したものが図１である。

図１　80%を基準にした達成度

	80%未満質問№.							80%未満	80%以上
児童	4						21	2	21
保護者	4	6	7	17	18	19	21	7	16
地域住民	4							1	22
学校職員	4	6	7					3	20

児童 21，保護者 16，地域住民 22，学校職員 20，多くの質問で，目標とした 80%を超えた。

但し，「80%に満たなかった質問」，「『とても』が全項目で児童の評価に比べ保護者と職員の評価が低くなっていること」は，検討すべき課題と考える。

【　評価の低かった質問について　】

①「４　友達を「さん」「くん」を付けていますか」が，児童・保護者・地域・職員いずれも低い。

※親しさの表れという認識で「呼び捨て」「あだな」などで呼んでいることが影響していると考える。

②「６　相手の話を最後まで聞いていますか」「７　相手の考えを受け止めてから自分の考えを伝えていますか」が，保護者や職員が低い。

※児童が捉えている姿と保護者や職員が期待する姿に差があることが影響していると考える。

③家庭での学習への取組に関する質問「１７　約束を守って」「１８　進んで」「１９　難しくてもあきらめないで」が，児童，保護者ともに評価が低い。

※家庭で学習する意義の認識，学習内容の質や量，学習環境等が影響していると考える。

④「２１　夜早くねていますか」が，児童においても保護者においても評価が低い。

※他の家族も含めた家庭としての生活状況が影響していると考える。

⑤児童自身の評価に比べ，保護者や職員の評価が低い。

※児童が捉えている姿と保護者や職員が期待する姿に差があること，職員にとっては評価の対象が複数であることが影響していると考える。

（２）取組について

「取組」を対象にした質問に対する児童・保護者・地域住民・学校職員の「『とても』と『まあまあ』を合わせた肯定的な回答」を「80%を基準にした達成度」と「80%に到達しなかった質問」について集計したものが図２である。

図２　80%を基準にした達成度

	80%未満質問№.	80%未満	80%以上
保護者	24	1	2
地域住民		0	2
学校職員		0	3

保護者への質問「２４　心にゆとりを持って，子供の思いを笑顔で受け止めていますか」以外 80%を超えている。特に「心にゆとりを持って」という要件は，その時の心の状態に左右されるために低くなったと考える。

２　成果と課題

【　成果　】

「相手のことを考えて行動することができる児童の育成」を目指して，１０の具体的な姿を提示し，学校職員，保護者，地域住民，取り組んできた。昨年度課題だった「ありがとう」「ごめんなさい」等の自分の気持ちを相手に伝える挨拶を伝えられるようになってきた。また，「『あたたかな言葉』を意識した言葉遣い，困っている友達や頑張っている友達に対して，相手を思いやった声掛けができるようになってきた。」という報告が職員から聞かれるようになった。

【　課題　】

１０の具体的な姿の中で，「相手の話を最後まで聞いていますか」「相手の考えを受け止めてから自分の考えを伝えていますか」の二つの項目が，児童自身の評価は目標とした８０％を超えたが，保護者や学校職員の評価は８０％に達しなかった。「最後まで聞く」「受け止めてから伝える」に対する児童の捉えと保護者や学校職員の捉えに差があること，児童の「意識（しているつもり)」と，保護者や学校職員の「観察した姿（ようには見えない)」にずれがあることが考えられる。

「相手のことを考えて行動すること」は，「相手を受け止めること」から始まると考える。「最後まで聞く」「受け止めてから伝える」姿をより具体的な姿として，児童・保護者・学校職員が共有し，意識を姿として実現できるようにすることが，現在の課題であり，「相手のことを考えて行動することができる児童の育成」のために有効な取組になると考える。

３　学校関係者評価委員会での意見　※課題に対する対応を考えるために

※「１－①」等の数字は，「１考察　（１）児童の姿について　【　評価の低かった質問について　】」の数字

１－①　「さん」「くん」を付けることの必要性は

時と場に応じた言葉遣いができることは，社会の一員としての社会性を身に付けるという意味で大切である。「学校」特に学習の場での言語環境を整えることを通して学ばせることが大切である。

１－②　保護者や職員が低いと考える児童の具体的な姿は

子供が「聞いている」と答えているのは事実だろう。むしろ大人が待てないために「聞いていない」と捉えてしまっている。大人が自身の伝え方を見直し，「聞くこと」のよさを体験させることが大切である。

１－③　「意義」の確認と，意義に応じた「質」「量」「環境」は

家庭学習の定着は中学校・高校での学習の土台となる。児童自身が家庭学習の意義を自覚できるようにすることが大切である。そのためにも，保護者が見て声を掛けることが大切である。

１－④　望ましい睡眠時間と，生活状況に応じた確保の方法は

医療や脳科学等専門的な立場から，睡眠の大切さや望ましい睡眠時間や睡眠の取り方等についての講演を企画するなどして，保護者に関心を持ってもらうことが大切である。

２　　「２４　心にゆとりを持って，子供の思いを笑顔で受け止める」取組は

「笑顔で」となると，なかなかできていないと考えるのではないか。心構えとしては大切である。